

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

てんじ かいせつ
 展示中の作品について、研究員が分かりやすく解説します。

えが
 歴史上の人物を描く
 —細川ガラシャの場合—

みなさんは、細川ガラシャという人を知っていますか？「ガラシャ」というと、なんだか外国の人の名前みたいな響きがありますが、そういうわけではありません。本能寺の変で織田信長を討った、あの明智光秀の娘です。本名は玉（または玉子）といい、ガラシャというのは洗礼名（キリスト教の信者になる、洗礼という儀式のさいに付けられる名前）です。洗礼名には、キリスト教の聖人の名前などが使われることが多いのですが、ガラシャは「神の恵み」を意味するラテン語のグラティアに由来します。

しかし、ガラシャはもともとキリシタン（キリスト教の信者）だったわけではありません。はじめは、仏教の禅宗という宗派の教えを深く信仰していたようで、とくに建仁寺の英甫永雄というお坊さん（ガラシャにとっては義理のいところに当たる人）に教えを受けていたと伝えられています。

みつひで む
 父光秀の起こした本能寺の変により、「謀反人の娘」となったガラシャ。やがて、夫の忠興から聞いたキリスト教の教えに関心を抱くようになり、自らの強い意志で洗礼を受けたのでした。

その後、信仰を深めたガラシャでしたが、関ヶ原の戦いに先立ち、徳川家康に従って出陣していた忠興の留守中、石田三成の軍勢に屋敷を囲まれてしまいます。豊臣方の人質となるのを拒んだガラシャは、家老の手を借り、自らその生涯を閉じました。38歳の時でした。



図1 細川伽羅奢 浅見松江 筆
 昭和5年(1930) 京都国立博物館(白寿斎コレクション)

さて、ガラシャがキリシタンだったということは、現在では広く知られている事実です。ガラシャ自身もこれを隠していたわけではなく、細川家の記録には「伽羅奢様」と明記されています。

ただ、江戸時代に徳川幕府がキリスト教の信仰を禁止する命令を出したこともあって、ガラシャの死後、この事実はあまり積極的には語られなくなります。むしろ、敵の人質となることなく、名誉ある死を選んだ立派な大名夫人として語られ、ガラシャに対する歴史的イメージが形成されてゆくのです。

ガラシャがキリシタンであったことが世間一般に広く知られるようになるのは、ずっとあと、明治時代後期以降のことと考えられています。つづく大正時代には、キリシタンとしてのガラシャをモチーフとする絵画が描かれるようになりました。そして、昭和時代のはじめ、浅見松江筆「細川伽羅奢」(図1)が生まれたのです。

教会を思わせる建物の中、祈りを捧げるガラシャ。合掌する手に掛けられている数珠のようなものは、ロザリオと呼ばれるお祈りのための道具。一番下には十字架が付けられていますね(図2)。ここに描かれているのは、間違いなくキリシタンとしてのガラシャの姿です。

生前のガラシャを描いた肖像画などは残っていませんから、もちろんこれは想像で描いたもの。たぶん、信長の妹お市の方の肖像画(高野山持明院所蔵の「浅井長政夫人像」)などを参考にしたのでしょう。明治時代には、ガラシャが容姿端麗だったというイメージも広まっていたので、同じ時代を生き、同じように美貌の人だったと伝えられるお市の方の肖像を参考にしたとしても不思議はありません(お市の方は37歳で亡くなっています)。

結局、こんなガラシャの姿は絵空事にすぎないと言ってしまえばそれまでです。しかし、歴史上の人物を描いた絵画が面白いのは、それが絵空事だからではないでしょうか。

一人の人間にはいろいろな属性(たとえば中学生とか、美術部の部員とか、弟からみるとお姉さんとか)があります。そして、どんな場所で、誰と一緒にいるのかによって、さまざまな顔を見せる生き物でもあります。その人のある瞬間の外見を記録するだけなら、写真のほうが正確かもしれません。しかし、そうした多様性を抱え込みながら生きる、厚みのある人物像を表すことができる点に、絵画ならではのおもしろさがあると言えるでしょう。

みなさんなら、このガラシャの姿に何を思うのでしょうか。絵を見る楽しみは、そんなことを語り合うところにもあるように思います。



図2 細川伽羅奢 浅見松江筆(部分)

(美術室 福士雄也)